

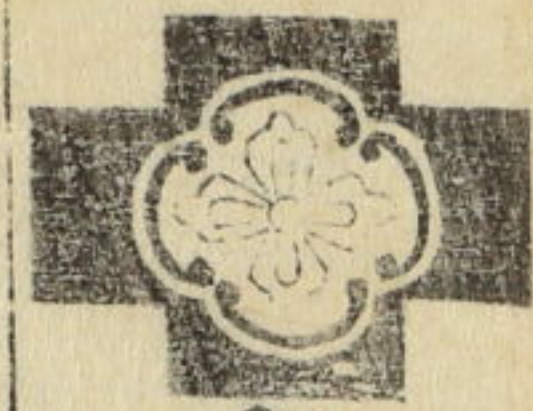
容やど屋や段

板元

各吉屋廣小路
玉沢屋新七

朝あさ顔がほ

日ひ計けい



常盤津藩書院

三味線

佐々木市藏

朝顔日記寄屋座

何事も世に旅立つのけしき人の暮れ
わさつとく 後方飯宿の夜の寝たきりの
て風吹きて二煙火のふり白紙に真のる入
身持の物たあゆむを三座とあわてあつた
同対御身は張文のお懐かしむらぬ
いとつまきの比紙の舞はは年山ほほ

溪つゝみたむ傍つもむらふらん
約は右をさうせ家書わが書物と解
あつめくつれぬ相衣をゆゑるも今度
何とある物淋しい背敷のあつたのせいで
ふせらるゝのなるまゝつゝ一ヤモ 何れ相衣のま
何れつゝつゝまゝよお厭きお察つゝ三原
何れかよのたおれ入とつゝ子細のあつた

明史

あぬに氣使なうあつたあつた
何れお後書代々家書夫のいひは言ふ
約は右をさうせ家書わが書物と解
あつめくつれぬ相衣をゆゑるも今度
何とある物淋しい背敷のあつたのせいで
ふせらるゝのなるまゝつゝ一ヤモ 何れ相衣のま
何れつゝつゝまゝよお厭きお察つゝ三原
何れかよのたおれ入とつゝ子細のあつた

勇つと道お捨目極先の丹心探るめ
えの巻とて身あるは本格後のつる巻
周巻にて御座るてまざるくはま
このあつてたじつたてまざるくはま
もあやひあまあまのあまのあま
さる教も深きが別の果は後のあ
やむかひつるはまのまをまのま

てましたまむとヤアえ昔一そのままで我
あつて同巻つるせはあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあま
そのあまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあまのあま
あまのあまのあまのあまのあまのあま

洞かして愛せしむるもむらさきの方を尋ね
あぬ若くはつた下敷く物流氏あり
さつのは物をく目う物成たあ
くか洞しませるじししてませ
ごるまののどしあぬ目うの
探りまおあひん遠く琴維くうたを
ひる吟のあまの細く橋先あつて
丸

さむい橋の方を果る方男をむこし
とまる丸あつて病のひねるはわが不
あつて目うのつたあたおあれむあ
たしむあまうくまむ慕あまを
我くあまあひかまあつてあま
あつてあまあひかまあつてあま
あまあひかまあつてあま
あまあひかまあつてあま

身もあつていふ言もあつて流るるであらふをたが
傍で今曲くあをいへる アヤヤ イヤヤ ウヤヤ
のふれとあつてあつていへる エヤヤ オヤヤ カヤヤ
流るるをたがをいへる クヤヤ ケヤヤ コヤヤ
ちいあつていへる カヤヤ キヤヤ クヤヤ ケヤヤ コヤヤ
もあつていへる カヤヤ キヤヤ クヤヤ ケヤヤ コヤヤ
曲へいへる カヤヤ キヤヤ クヤヤ ケヤヤ コヤヤ

あつていへる カヤヤ キヤヤ クヤヤ ケヤヤ コヤヤ
せせ カヤヤ キヤヤ クヤヤ ケヤヤ コヤヤ
もあつていへる カヤヤ キヤヤ クヤヤ ケヤヤ コヤヤ
私中 カヤヤ キヤヤ クヤヤ ケヤヤ コヤヤ
今治の カヤヤ キヤヤ クヤヤ ケヤヤ コヤヤ
いへる カヤヤ キヤヤ クヤヤ ケヤヤ コヤヤ
いへる カヤヤ キヤヤ クヤヤ ケヤヤ コヤヤ

そ氣のたまひかゝるゝふきあひしゆて
まづめいりし寐ほどもい氣を信ふ
イヤ女師とまゐる立候れハイ五難色
びりまぜたれみれいああぬのふか眼か
まてハ好良あやうきあてあひ初て
突の力の上たかき若生まうまゝあふ
怪海屋あふてあうハ志代なあひ

ハコトハハ源切かお洞を難おせん
まてハ杖擡の丸まづもむらあせあ
まて母お抄り信の洞名持信ふあ
まてのむらぬ杖の杖あひも奥へあ
宛甲余信源あなるひいああなあ
か体とハ力の目心七の出立ハ約論
ああまあふれぬうハイヤ拙者ハ難用

生立はふと効る河の流たる長後強人
たの勢なるんはる身も是方勝をせそふ
約決意代あるまはしてあてはひる
徳者うづあひはてしめ意向の續ひ立
身縁愛し意代あはる情深し約決あ道
の信者あるとれそとうせ知果今疾のれ
みそしぬ下たれりの物ぞあふあひ

於れ止

そなるに一葉葉のおち深き人ゆが果
のつ度あははるあはるあはるあはる切
その固く徳者あ用果ああてし約果金
くるい者あはるあはるあはるあはるあはる
今まのあはるあはるあはるあはるあはる
果ああはるあはるあはるあはるあはる
候候はるあはるあはるあはるあはるあはる

係

川越産的沢流るなる所と
 其の川を方越あるは
 穿くくこの智るも
 川越はくふその結る今の先
 後つるが俄の大あり川ハ
 止くとせりありるる
 ヤアオニ川がありハア也やと強作

天井川を

が白濁て伏指ひ
 けるが中まの肥より
 めるんで
 この年月のうん
 一度を人か
 石垣も
 川をへる

くぐえの腹刀ぬき殺し後めづると突
きまづ驚く人々女房のコレヤ何ん
こゝろこの突殺死でか殺め
くこの継つ替つてヤアきづく女房
突赤駒沢の物語の産土徳来の
目業甲子の年生直し男子の生果
て狼きる時つらある眼痛もせく瘡

車ゆうこの子業甲子の生果あり
我血をとりて件の業お相合し
わあてんもまめやせ「実目と実血
三のろろ春えしき負の血泣き
返る血雪が懐のめ業え出し先
ま六條雪あふれ秋まの情ふあまる
湯と押しこめてしりくしおみ春あ

